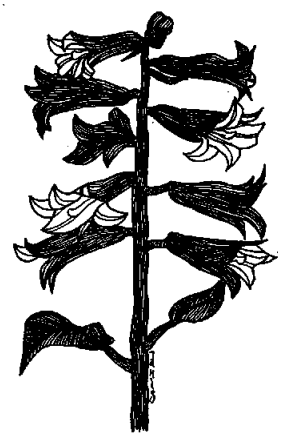

北海道の道路並木 ②

松井善喜

プラターヌス

鈴のような円い実を小枝からたれさげているので、スズカケノキの別名がある。札幌市の街路樹として明治年代から導入され、現在、天使病院附近などにかなり高齢の並木がみられる。

そのおおらかな樹姿、美しい樹肌、広い葉の緑陰、気候や土地にたいする強い適応性から道路並木として各地に広く植えられている。原産地は欧州南西部から小亜細亜地方で、高さ二五～三〇メートルに達する落葉高木、材は木理密で光沢美しく、器具、家具、船舶用材などに用いられる。

アメリカプラターヌスは北米南東部産で一層成育がよい、カエデバスズカケノキは以上両種の中間種で、ともに街路樹として広く使われている。プラターヌス、またはプラターナスの呼び名はギリシャ語のプラタノス、すなわち幅の広い、大きい葉が語原となっている。アメリカではスズカケノキをボタンノキと呼んでおり、婦人服のボタンを連想させる。この木は古代ギリシャからたいせつにされ、アテナイのアカデメイアに植えられた。花言葉は「天才」である。

プラターヌスは公園などに植えるとかなり高く伸び、野幌の樹木園のは三五年生で一六・七メートルの高さになっている。

ハシドイ

ハシドイには本道の林野に自生する白い花房のハシドイと、ヨーロッパから輸入された淡紫色の花房のライラックに大別できるが最近はいろいろの園芸品種が栽培されるようになり、花の色も淡紫色から濃紫色、赤白、青色などがあり、八重咲ライラックもあって、花が一層美しくなってきた。

北国の六月の空は爽やかで、新緑のローンにただようリラの花のたかい香り、ライラック祭は札幌市の春の観光行事であり、ライラックは近代都市札幌を表徴する市民の樹である。この木はヨーロッパ南東部原産で、高さ七メートルぐらいになる。札幌市に入ったのは大正初期で、外人の宣教師が故郷を偲ぶ想い出の木として持参したものだといわれ、植物園にはこの老株がみられる。

ライラック属はヨーロッパ、温帯アジアに三〇種あって、いずれも芳香のある小花を多数開花するので美しい。朝鮮から中国北東部産の種類にチョウセンハシドイ、ハナハシドイがあり、藤紫色の芳香ある花が咲くが、小形で着生があらい。

ハシドイは小高木なので、ゆったりと緑冠を拡げることはないが、背景の風物と調和した淡紫色の花の咲く並木の介在するのも趣きのあるものである。道産のハシドイは粗皮が厚いので、除雪などによる損傷は少ない。

トチノキ

トチノキは道南のブナ林のなかに混生し、小樽近郊まで天然に分布している。パリーのセーヌ河畔のマロニエの老木の並木はヨーロッパトチノキで、五葉の葉による濃い緑蔭はいかにも落ちついた歴史の街といった印象を与える。このトチノキはバルカン半島南部地方を原産地とするもので、道産のトチノキよりも樹形も葉も小形であるが、花は大形で、白に赤味をさして美しい。

道産のトチノキは風土にたいする適応性が一層大で、力強い緑冠を構成するので、今後、道路並木として開発したい樹種である。

シンジュ

シンジュは、ニガキ科のニハウルシ属の樹木で、元来、南支那の暖かい地方を原産とする常緑樹であるが、寒地では落葉樹となり、本道にもよく生育する。シンジュの大きな羽状複葉と通直な樹姿は、街路樹としてもふさわしいものである。ただ冬の長い本道では、裸木は太い枝が疎らなので寂し

い感がする。

牧野博士によるとシンジュは明治初年にわたが国に輸入され、江戸から東京に改名された帝都の中心街にわが国最初の街路樹として植えられ、戦前には内務省の裏側に二・三の老木が残っていた。

北海道では、明治十四年に開拓使が札幌郊外円山苗畑にシンジュを播種し、養成苗を払い下げた記録があり、現在、札幌市豊平町経王寺の境内にたっている老大木は、当時の払い下げ苗を植栽したものであろう。戦前、満州ではシンジュの葉でシンジュ蚕やエリ蚕を飼育して、繭から糸をとっていた。これらの野蚕は害虫となって、シンジュ並木を食害することがある。シンジュは札幌市内には街路樹として植えられているが、道路並木としてはあまり普及していない。

サラサドウダン　道南地方に分布しドウダンツツジの一種で、花の形からフウリンツツジ、外国ではベルフラワーの名で知られている。落葉低木で高さ三〜五メートル、枝は輪生してやや太い、サラサドウダンは丈の高い道路並木というよりは、特殊なコースの道路に風致をそえ、道路の美化のために植えられるものである。

六月頃枝の頂や腋から房状に五〜一五の花が下垂し、白色ないし淡黄色の鐘形の花が咲く。土壌にたいする適応性が強いので道路並木としての植栽に適する。

オウデマリ　テマリバナとも呼ばれ、スイカズラ科のヤブデマリの園芸品種で、高さ四メートル内外となる。六月の候に、テマリ状の真白い聚繖花序をつける。この樹は農家の庭にもよく植えられており、真白い球形の花は赤や黄色のツツジの花とともに、新緑に映じて道行く人の目を楽しませる。

原産地は本州の関東以西から中国、台湾で、温暖地に分布するが、寒地にも適応できるので、適地と保育に留意すれば道路並木として広く植栽することができよう。

ハクウンボク　藻岩山、円山の天然林によくみられる高さ八〜九メートルの亜高木である。大形の葉は裏面が密な毛でおおわれているので銀白色を呈し、五〜六月の候に一〇〜二〇センチの総状花序の花を多数つける。白雲木の名は、満開の白花が白雲のようにみえることから命名されたものである。

従来、並木に植えた例は少ないが、起伏の多い山寄りの道路の並木として一層植栽を進める必要があろう。

ニレ　アメリカのマサチュセッツ州の州の代表樹がニレである。明治初年、同州から札幌農学校に赴任したクラーク氏は、同校の農場に立っていたニレの樹を残すように指導された。ニレは冬の裸木も幹、枝、細枝と均整のとれた形態をしているが、並木の場合には枝が拡がりやすいので、適度に剪定する必要がある。

マンシウニレは葉も小さく、枝も繊細なので、ニレのように截枝の必要がなく、従来、生垣などに植えてきたが、幅の狭い道路の並木としても適当である。

ツリバナ　本道に自生する小高木で、対生の葉が色づく頃、赤味の円形の実をたれさげる。並木対象のツリバナにはオウバツリバナ、ムラサキツリバナがある。また、ツリバナより高さが低いが、マユミも並木に加えたい木である。四つの稜角のある赤い実は、ツリバナよりも大きく印象的である。

また、コマユミは海岸砂丘の乾燥地にも自生しており、秋の紅葉も美しいので、サラサドウダンと並べて道路の美化に植えたい低木である。

クルミ　河川や渓流ぞいの道路に植えたオニグルミは生態的にも安定した景観を具え、単一樹種の並木に風景の変化をそえる。クルミの太い枝、複葉の大きい葉は材にみられるような重厚な感がする。

サワグルミは、オニグルミ属と異なり、種実が全く相違しているが、羽状複葉の葉は近縁種の感がする。生長が一層早く、通直に伸びて、道路並木として適当である。道南地方に自生し、札幌の植物園には大正年代に植えた壮令樹の一群がみられる。自由に伸び、旺盛な生命を感ずるが、幹が通直で枝、業が均衡とれており、並木としてのよい素質を兼備しているので、積極的な植栽を奨めたい。

ヤナギ　普遍的に植えられているのはシダレヤナギである。シダレヤナギは元来、支那中部の原産で、水郷地帯に情緒をただよわせる枝のしだれたヤナギである。北海道の風土にも適し、札幌市には街路樹や庭園樹として古くから植えられている。

往時、豊平館のあった北一条西一丁目の角の老大木は自動車の排気ガスにもめげずやわらかい緑蔭を補装道路に投げている。といっても、この樹種が排気ガスに特に強いというわけではない。昔恋しい銀座のヤナギは、カー・ラッシュの犠牲となって敢えなく消え失せた。街路樹としてはかなり普及しているが、並木としてはまだ少ないようである。

ウンリュウヤナギも、支那原産のヤナギ

でねじられた枝、細い葉は過密になることなく、東洋風の趣きの感じられる樹で、市内各処に散見される。水郷地帯の道路並木として適当である。

道内に自生するヤナギのなかにもキヌヤナギのように、葉裏が毛茸によって絹糸光沢を呈する美しいヤナギがある。また、葉の小形なエゾヤナギ、大形のオウバヤナギなども、ところを得れば自然景観に調和した並木となろう。

キササゲ　本道には従来、アメリカ産のハナキササゲが導入試植されている。この木は北米のオハイオ州・イリノイ州などの内陸の諸州に自生する。花が美しく庭園樹に適するが、開業が遅く、寒凍害にかかりやすい。

キササゲは支那原産の落葉小高木であるが、本州では各地の河辺に自生状に成育しササゲのように細長いさく果は利尿剤として名高い。往時、雷よけのまじないとして植えている地方があった。葉は大形、長柄で対生し、夏に枝先に円すい花房を頂生するので、深緑のシーズンには美しい木である。本道では並木に用いた例が少ない。

コブシ　早春、他の花に先んじて香りたかい白い花が咲くので、長い冬から解放された灰色の道路にいち早く春のきたのを告げる。木肌も灰白色をおび、裸木も美しいが、秋の紅葉はくろずんで、黄紅葉とならないで落葉する。コブシは樹姿からみても、虫菌兎鼠害などその抵抗性の強い点からみて道路並木として一層植栽すべき木であろう。

クラブリンゴ　カイドウの種類は一般にクラブアップルと称して、庭園や並木用のいろいろの園芸品種ができている。本道では道路並木としては試植段階にあるが、今後、並木として期待のもてる郷土産クラブリンゴには、エゾノコリンゴとエゾズミがある。エゾズミは北部の海岸砂丘にも自生しており、気象への適応力が大であるから、並木樹種としての研究の必要がある。

エゾノコリンゴは高さ五～一〇メートルの小高木で、五～六月の候に短枝に四～六個ずつ房状に花をつける。花は初め淡紅色後に白色に推移するが、花弁が大きく、花の期間も長くて美しい。秋は濃紅から暗紫紅色に移る扁球形の果実をつけて、これまた道行く人を楽しませる。

シベリアリンゴは一〇メートル内外の小高木で、紅色の蕾から白色がかった花が咲き、芳香があり、果実は一～一・二センチで、渋い酸味がある。アメリカでは主として花木として植栽している。

クラブリンゴは、ケムシやアブラムシなど虫害をこうむりやすいので、並木に植える場合には虫害の予防を考慮しなければならない。しかし、北国産の花も実も美しい樹種であるから、道路並木として一層造成しなければならない。

ケヤキ　明治年代に植えたケヤキの老木が、札幌市の大通り六～七丁目にみられる。繊細な枝葉を拡げた緑冠はローンとよく調和し、散策の人々に静かな休息を供している。ケヤキは本州産であるが、明治初期から試植され、札幌辺ではかなりよい成育状態にあるから道央以南の並木として植えることができよう。しかし粗皮が薄いので、除雪のさいに傷められる懸念がある。

トドマツ　切りくずし斜面などを常緑の樹冠でおおいたい場合、トドマツ並木が適当である。しかし、トドマツは排気ガスやホコリに弱く、かつ木肌が薄く、皮焼けや除雪で損じやすいことから、単木的植栽よりは三本鼎立した巣植え植栽が望ましい。

北海道の代表樹種エゾマツ・アカエゾマツもこのような三本巣植え方法で仕立てれば、道路並木として植えることができ、高原の道路など、針葉樹の並木景観の望ましい場合が少なくない。

イブキ　別名ビャクシンは本州の宮城県以南に自生し主として海岸地帯に散生し、高さ一五～二〇メートルに達する。葉は成長したものは鱗葉、幼条・萠芽・下枝は針葉で形態の異ることから二色檜、檜柏の名称がある。多くの園芸品種に改良されており、盆栽として仕立てている園芸品種をシンパクといい、新芽の色で金柏・銀柏に分ける。

道路並木には通常のイブキ、すなわち鎌倉イブキが用いられる。これは葉が少し太く、木がしまっている木立型の種類である。道南の景勝地などに、イブキの並木のふさわしいところがある。また、サラサドウダンなどともに特殊道路の風致的装飾に用いられるものに、シンパクや郷土のリシリビャクシンがある。

×

以上は国道に既に植栽している並木、今後植栽を計画している並木について二、三の説明を加えたものであるが、この他の樹種についても並木として植栽の望ましいもの、研究してほしいものが少なくない。これらの主な樹種について簡単に記そう。

ミズキ　ミズキはお正月のマユ玉の木で赤味をおび、水平に拡がる枝、枝一面につけた散房花序の多数の白い小花、遠くから眺めると木全

体が白色にみえるほど花が咲き揃っている。ミズキのように樹高一〇メートル内外の木は刈込みの手数が少なく、街路樹としてとり扱いやすい。

ヤマボウシ　ミズキと同じ属であるが本州産である。花が大型で四照花の漢名がついており、高さ三～八メートルで、庭園樹として一層適当である。アメリカヤマボウシも花が美しく、庭園に植えられている。道路並木として道央以南には植栽できよう。

サンザシ　本道に自生するのはエゾサンザシで、白い散房花序と暗赤色の実をつけるバラ科の小高木である。セイヨウサンザシは花が大きく観賞用として庭園に植えられている。エゾサンザシは気候的適応性が強いので、道路並木として広く植栽することができよう。

アズキナシ　サンザシと同じバラ科の小高木で、従来街路樹に植えられていないが、小さい赤い実には初冬の候小鳥が集まるので、裸木になっても美しい。円錐形の樹冠は枝を剪定する必要もなく、樹皮も除雪で損傷をうけることがない。ただ、花は小形で点生しているので目立たないが、全道各地に自生しているので、気候的適応性が大で、道路並木として普及すべき木である。

イヌエンジュ　春に銀白色の複葉の若葉が開葉する頃、ついで白い房状のマメ科の花の咲く頃が美しい。亜高木なので枝の剪定の必要も少なく除雪の損傷の心配がなく、気候的適応性が大なので、並木用の植栽が考えられる。

カツラ　カツラはわが国特産の美しい樹である。従来並木に植えられていないのは根が繊細で浅く拡がり、春早く開舒するので移植のさいの活着が悪いためであろう。早春の黄ばんだ新緑、秋の紅葉も美しい。枝、葉、樹姿とも、女性的な繊細な感じのする樹である。並木としての造成を研究する必要があろう。

×

以上は郷土樹種について並木として望ましいものを述べたが、外来樹種のなかでも本道における造林成績から並木として期待される樹種が少なくないので、二、三あげてみたい。

サトウカエデ　アメリカの北東部からカナダの南東部に分布し、早春樹液を採集して、メープルシラップを造るので有名である。本道のイタヤの二倍の含糖量がある。葉はイタヤより大形で、道産のクロビイタヤに似ている。この葉はカナダの国旗にとり入れられ、カナダの代表樹となっている。

原産地の気候は北海道と近似しており、本道には明治十八年頃から導入され、生育は良好であるが、林地では野鼠、野兎に食害されやすい。道路並木はこれらの被害が少ないので、普及させることができよう。

レッドオーク　明治二十四年、アメリカのアーノルド植物園から北大植物園に送られたレッドオーク（アカナラ）の種子から養成した苗木は現在七七年生の老木となって、植物園に成育している。この樹から採った種子で、北大植物園正門前通りのレッドオーク二世の街路樹ができたのである。

昭和初葉に植えた壮令のこの並木はおおらかに枝を伸ばし、鋸歯の深い大形の葉は道産のミズナラよりもこんもりした緑冠を構成し、男性的な力強さを感じさせる。アメリカ東部温帯地方を原産とするが、道央以南では道路並木として広く植えることができよう。

ウラジロドロノキ　葉の裏が白銀色の繊毛でおおわれているので、ウラジロポプラ、ギンドロの名で呼ばれている。中央ヨーロッパより北と東に広がり、西南部シベリヤと中央アジアに分布している。本道には、明治末から大正初期にかけて導入されている。ポプラのような旺盛なな生長はしないが、道産樹種にみられないエキゾチックな樹姿が道路に変化を与え、単調な並木景観を引き立たせることができよう。気候的適応性は大で、各地に植えられる。

あとがき

以上、道路並木について簡単な説明と希望を述べたが、道路沿いの景観との調和、除雪、病、虫、兎、鼠の諸被害にたいする抵抗性、気候、土壌にたいする適応性、樹種植え方などいろいろ問題が残っている。

ことに病虫害がでた場合の早期発見、早期駆除の体制の強化、並木の病虫害と畑作物の病虫害との関連性の研究など、今後の研究課題となるものが多い。道路並木は郷土の美化に、生活を楽しくするうえに一層の造成を望むものである。

従来、道路並木には、とかく本州方面の植栽樹種がそのままとり入れられてきた憾がある。気温、風雪など、自然条件の酷しい北海道の道路並木には郷土樹種のなかから適当な風致樹種を選ぶべきである。既定の樹種にこだわらないで、従来植栽例の乏しい樹種のなかから広く並木樹種を選択し、この苗木の養成法、肥培植栽法などを研究する必要がある。—完—

（北海道林業改良普及協会会長）